

梅崎春生「つむじ風」における「明治生れ」批判

——「太陽族」批判を背景として——

高木伸幸

はじめに

梅崎春生の長編「つむじ風」(昭和三十一年三月二十三日
十一月十八日「東京新聞」)は、これまでユーモアあるエ
ンターテインメント小説¹⁾として、また「家柄に弱い庶民の俗
物性」や「実態のない家柄の無意味さ」を「諷刺」した小
説²⁾として評されてきた。この小説の主人公陣内陣太郎は嘘
つき男として設定され、特に「松平家」の御曹子を騙るこ
とで、出会った人々から次々と金銭を巻き上げ、騒動を起
こし、春先の「つむじ風」のごとく、最後は「遁走」して
しまう。こうした主人公像に焦点を当てて「つむじ風」を
論ずれば、上記の二つの方向で確かに評価することができ
よう。

しかし「つむじ風」には、主人公陣内陣太郎に加えて多

くの脇役たちが登場する。主軸となる陣太郎の物語と併せ
て、脇役たちそれぞれの物語も描き込まれている。主人公
のみならず、脇役たちの物語にも目を向けることで、「つむ
じ風」は、より多くの、多面的な解釈が成り立つ小説と言
える。

本論では、五十代の登場人物三名と、二十代の四名との
関係性に注目する。猿沢三吉、泉恵之助、加納明治ら五十
代三名と、猿沢一子、泉竜之助、陣内陣太郎、西尾真知子
ら二十代四名との、いわば年長者と若者との関係について
論じたい。

結論を少し記せば、彼ら五十代三名へ向けて、若者たち
の立場から批判を表していくことで、「つむじ風」には、当
時の日本社会、それも文壇の影響を受けた一つの社会現象
に対する梅崎の異論が提示されている。この小説が持つそ

の一側面を追究することにより、梅崎春生文学に内包された同時代性、社会性を明確化できよう。以下に考察を進める所以である。

初めに「つむじ風」の登場人物について、それぞれの関係も踏まえながら、少し詳しく説明しよう。

加納明治は小説家で「五十歳」。物語の冒頭で、運転する「三・一三一〇七」ナンバーの自動車により陣内陣太郎をはねて逃げる。陣太郎から突き止められ、陣太郎が騙る〈松平姓〉を半ば信用するばかりに、次々と金銭を脅し取られていく。

猿沢三吉は銭湯三吉湯主人で「五十二歳」。大学生の西尾真知子をメカケとして囲っている。偶然、加納明治と同じ「三・一三一〇七」ナンバーの自動車を所有しており、そのことで、陣太郎の訪問を受ける。真知子を囲っているのを察知した陣太郎から脅迫され、彼が騙る〈松平姓〉に関心を持った所為もあって、これまた、次々と金銭を取り立てられていく。

泉恵之助も泉湯を経営する銭湯主人で、同じく「五十二歳」。猿沢三吉と将棋の勝敗が切っ掛けとなって喧嘩を始め、泉湯と三吉湯の留まるどころない「値下げ競争」へと対立を深める。

右の年長者三名に對して、若者四名は次の通り。

猿沢一子は三吉の長女で「二十歳」。

泉竜之助は恵之助の一人息子で「二十五歳」。

三吉と恵之助が対立を深め、「値下げ競争」を始めたこと、猿沢家、泉家とも食事は「芋飯」や「バクシヤリ」「メザシ」に落とされ、一子、竜之助らは栄養失調になり、多大な迷惑を被る。しかも一子と竜之助は、その対立の中、実は恋仲、「悲恋」の關係にあつた。二人は一計を案ずる。相手の父親が「前非を悔いてる」と、互いの父親に嘘の申告をし、かつ対立の一因であつた建設中の第四・三吉湯について、銭湯でなく、貸劇場に改築する提案を出したのである。三吉も恵之助も受け入れ、貸劇場を二人の共同経営にすることで、対立はようやく終焉する。

西尾真知子は、先にも触れたごとく、猿沢三吉のメカケで、あと一年で卒業の大学生。彼女にとってメカケは学業を続けるためのアルバイトに過ぎない。メカケの立場でありながら、旦那の三吉をむしろ「道具視」しており、三吉が月額一萬円の小遣いを五千円に減額しようとすれば、「おばさま(三吉の妻ハナコ)のところに、いただきにあげるわよ」と脅してみせたりもする。

もう一人、嘘つき男の主人公陣内陣太郎は、「二十七、八」歳。〈松平姓〉を騙りながら、多額の金銭を巻き上げていくが、三吉と恵之助の対立を終わらせた貸劇場への改築

案について、竜之助に助言したのは、実は彼であった。物語の終盤、陣太郎は真知子と恋仲になり、最後は一緒に「遁走」している。

以上のごとき主要登場人物の中で、猿沢三吉と泉恵之助による銭湯主人同士の対立については、既に同じ梅崎の小説「ボロ家の春秋」（昭和二十九年八月）【新潮】のモチーフ継承が指摘されている。読者を笑わせる「意地」や「面子問題」の表現が、同作から確かに受け継がれており、適切な分析と言える。しかしその二人に加納明治を加え、若者との関わりにも注目して考察すれば、「つむじ風」には、また新たなモチーフが見えてこよう。

すなわち年長者たちが一様に愚かな振舞いを目立たせているのに対し、若者たちは皆、賢明であり、したたかな行動を見せていることである。

例えば旦那がメカケにいいように扱われる三吉と真知子の関係がそうであり、三吉と加納明治の二人も、陣太郎から易々と騙されている。猿沢家、泉家においては、親が子供に多大な迷惑を被らせている一方、陣太郎の助言に基づく一子、竜之助の機転を利かせた対応によって、親たちの対立は解消され、いわば年長者が若者に救われてさえいるのである。

ちなみに親たちの対立が終わり次第、一子と竜之助の恋仲は逆に冷却してしまうのであるが、これは、ユーモア小

説ならではの皮肉な結末であろう。

梅崎春生は「つむじ風」連載開始より約二年半前、エッセイ「近頃の若い者」（昭和二十八年十月）【新潮】を発表し、「近頃の若い者云々という中老以上の発言は、おおむね青春に対する嫉妬の裏返し表現である」また一種の自己嫌悪の逆の表現である」と記した上で、自らの主張を次のように書いていた。

しかし現代においては、近頃の若い者を問題にするよりも、近頃の年寄を問題にする方が、本筋であるとは私は考える。若い者と年寄と、どちらが悪徳的であるか、どちらが人間的に低いかという問題は、それぞれの解釈で異なるだろうが、その人間的マイナスが社会に与える影響は、だんちがいに年寄のそれの方が大きい。（中略）若い者にろくでなしが一人いたとしても、それは大したことではないが、社会的地位にある年寄にろくでなしが一人いれば、その地位が高ければ高いほど、大影響を与えるものだ。そして現今にあつては、枢要の地位にある年寄達の中に、ろくでなしが（中略）うようよという程度にいてと言つてもいい状態である。それを放置して、何が今どきの若い者であるか。

梅崎春生は、何時の時代にも年長者の嘆きとして発せら

れる「近頃の若い者云々」という、いわば定番のごとき若者批判が、必ずしも適切でないと感じていた。むしろ「つむじ風」連載当時の日本社会にあつては、「枢要の地位にある年寄達の中に、ろくでなしが」「うようよ」存在し、年長者こそが社会にマイナスを与え、若者たちを困らせていると考えていた。従つて猿沢三吉と泉恵之助の対立は、ユーモアの中にも年長者による社会への悪影響を暗示している。加納明治を含めた三名の愚かさも、ただなる戯画でなく、若者を批判する年長者への皮肉が含まれていよう。

他にも、親たちの「値下げ競争」に際して、泉竜之助は「どうしてこの世のおやじたちはあんなつまらないことではないかみ合つて、我々若い世代を不幸におとし入れるんだろうなあ」と長嘆息し、猿沢一子に至つては「實際近頃の大人の気持は判らないよ」と、年長者とは逆さまの発言をしている。右に見る梅崎の考えが、若者の視点から表されているのである。

「つむじ風」は、若者の立場に寄り添いながら、年長者批判を展開した小説でもあることが、ひとまず明らかにできたと見えよう。

二

「つむじ風」において、年長者三名がどのように描かれているか、いまま少し踏み込んでみたい。

先に記したように、加納明治は「五十歳」、猿沢三吉と泉恵之助はともに「五十二歳」である。従つて「つむじ風」連載時が物語の現在とすると、加納明治は明治三十九年頃、猿沢三吉と泉恵之助は明治三十七年頃に生まれた、三名とも「明治生れ」だと推察できる。特に加納明治は、その名前からも明治に生まれたことが匂わされており、この加納が彼らの最年少であることを考慮すれば、三人とも「明治生れ」だと捉えて差支えない。

実際、猿沢三吉と泉恵之助は、「明治生れ」であることが、作中ではつきりと、繰り返し言及されているのである。

例えば泉恵之助と猿沢三吉は、対立の発端となつた将棋の勝敗に関わるトラブルにおいて、互いに「つかみ合い」「亢奮」する。そのため恵之助は「心慄亢進をおこし」、三吉は「血圧」が心配になつて、二人とも「横になつて」喘いだ。梅崎はその際の二人に対して、語り手に次のような見解を述べさせている。

そんなに自分の身体が心配なら、初めから喧嘩しなければいいのと思うのだが、とかく明治生れの人間には、こういう不条理な意地っ張りな傾向があるようだ。

また泉恵之助は、三吉湯との「値下げ競争」に臨んで、

泉家の食事を「バクシヤリ」「メザシ」に落とす。猿沢三吉においては、若い頃「自動車に泥水を頭からひっかけられ」た故に、「一生かかって自家用車の持主になり、諸人に泥をひっかけてやろうと志」した。梅崎は前者に対する竜之助の憤慨として、「明治生れの人間のわからずやには、手を焼く」と記し、後者に対しては、語り手を通して「資本主義興隆期の明治に生れた人間の中には、間々こういう考え方をしている」と批評している。さらにメカケ真知子を「乗り物」に喩える三吉の発言について、「どうも明治生れの人間の中には、とかくこういう不謹慎な女性観の持主がいるようだが、全く慨嘆にたえない」とのコメントも加えているのである。

このように見てくると、「つむじ風」に登場する五十代の年長者三名は、「明治生れ」であることが冷笑気味に強調されており、いわば「明治生れ」であることを一つの理由として、梅崎から笑われ、批判の対象に据えられていると言えよう。

実際「つむじ風」連載開始の直前、梅崎春生は十返鑒との「創作対談(9)現代の不信」(昭和三十一年三月『新日本文学』)の中で、「明治生れの間は原則的に信用できない」「ぼくらの大正生れと生活感情の何か違いがある」と発言していた。梅崎春生はその理由として、「明治生れの間は」「天皇には盲目的服従」で「天皇を守ろう」という気持が

ある」ことに言及し、加えてその「天皇制」との問題と関連して、「軍隊」では「上官の命令は朕の命令と心得よ」という心がけにみんな便乗して「いたことに」「腹が立つてしようがなかつた」とも述べている。

ここで加納明治、猿沢三吉の二人は、陣内陣太郎が騙る〈松平姓〉を半ば信用するあまり、多大な金銭被害を被っていることが改めて想起されてくる。もう一人の「明治生れ」、泉恵之助も、陣太郎から金銭被害こそ被っていないが、「松平とか徳川などの家柄には、人並以上の関心を保有している」と記されているのである。

彼ら三人の〈松平姓〉への興味、関心、またそれ故に騙される滑稽な姿については、本論の冒頭でも挙げたごとく、「家柄に弱い庶民の俗物性」や「実態のない家柄の無意味さ」に対する「諷刺」として、既に先行論で論じられている。今回の考察では、そのことも踏まえながら、そこには「明治生れ」に対する梅崎春生の不信感が表されていることを強調したい。

つまり〈松平家〉は封建的な社会秩序に支えられた〈權威〉であり、〈天皇家〉は、封建制から続く明治憲法下において〈最高權威〉として存在していた。彼ら三人が寄せる〈松平家〉への関心は、「家柄」の問題に収まらず、「明治生れ」が抱く、いわば〈天皇崇拜〉の延長上に存する。陣太郎に騙される彼らの滑稽さを通して、「明治生れ」が「天皇

には盲目的服従」であることを、梅崎は遠回しに批判しているのである。

他にも「値下げ競争」を続ける二人の「明治生れ」の行動に目を向けると、例えば泉恵之助は、食事を「バクシャリ」「メザシ」に下げるに当たって、自宅の茶の間に「ゼイタクハ敵ダ」「欲シガリマセン勝ツマデハ」と貼り紙する。一方、猿沢三吉は「隣組長的弁論」で食生活の「質素化、簡素化」を強調するものの、娘たちから反発され、最後は三吉一人が取り残され、母娘らだけで中華料理店へ行かれてしまう。その際の三吉の姿が「戦争末期の日本軍部のように、皆から見離された格好」と形容されている。

「値下げ競争」の影響により、「芋飯」や「メザシ」に下げられた泉家、猿沢家の食生活は、日本の「戦時体制」を彷彿させるところがあり、互いに対立することで、家族に困窮した食生活を強いた泉恵之助、猿沢三吉の二人には、戦時中の軍部をイメージさせる表現が用いられているのである。

戦時中の軍部への批判、戦争批判が、「つむじ風」に明確に描き込まれていると直ちに断ずることはできない。右に挙げた表現も、ユーモア・エンターテイメント小説として、読者を笑わせようとしている趣が強い。しかし、そうではあっても、この小説に登場する「明治生れ」三名に、梅崎春生が考えるところの、その世代の欠点が集約されている

ことは既に見てきた通りである。また「明治生れ」が「天皇には盲目的服従」であることと、「軍隊」に対する梅崎春生の腹立ちが、この作家の中で深く結びついていることは、先に見た対談からも容易に窺われる。だとすれば、「つむじ風」には、戦時中における「明治生れ」のあり方に対する梅崎の批判が、やはり隠されていると見てよい。「明治生れ」の為政者、軍部の指導者たちが、「意地」や「面子問題」にこだわったために、また「天皇には盲目的服従」であった故に、無益な戦争を長引かせ、多くの国民、中でも若い人々を多数犠牲にしたそのことを、この小説における「明治生れ」と若い世代の関係は、笑いの中にも、秘かに、それとなく諷刺しているのである。

「明治生れ」ではないが、もう一人、猿沢三吉にメカケ真知子を仲介した人物として登場する上風タクシー会社の社長、上風德行について補っておきたい。

「四十男」として記される上風德行は、「戦争中」「海軍の潜水艦乗りだった」という設定で、タクシー会社部下に対する「命令のしかたも大へん勇ましく荒っぽい」。如何にも元軍人らしく描かれている。この上風德行が社長を務める上風タクシー会社は、「毎日の如く、所属運転手が人をひき殺したり、はね飛ばしたりした」ために、物語の最後に「とうとうつぶれ」てしまう。上風社長自身も「今では、生命保険の外交員になって、毎日てくてくと勧誘に歩いてい

る」。この結末に見るように、上風徳行は「つむじ風」の中でも、梅崎から好まれず、マイナスイメージを与えられている人物と言えらる。

「つむじ風」連載当時、スピード違反など、乱暴な運転によるタクシーが目につき、それらを批判的に称した（神風タクシー）なる言葉が現れた。上風タクシーおよび上風徳行社長は、その（神風タクシー）を明らかにもじった設定である。梅崎春生が（神風タクシー）に不快感を抱いていたことは、いくつかのエッセイ、小説より確かめられる。上風タクシー、上風徳行に付与されたマイナスイメージは、

一つには現実の（神風タクシー）に対する梅崎春生の批判的な心情の現れであろう。しかし上風徳行を元軍人として設定していること、また現実の言葉のもじりとは言え、特攻隊を彷彿させるその命名も併せて考えると、そこには、戦時中の軍部への梅崎春生の怒りや嫌悪感も、当然含まれていると見てよからう。「つむじ風」における戦争批判の裏付けとして加えておく。

三一（一）

やや考察の本題から逸れるが、「つむじ風」には、連載当時の文学界を意識した表現、いわば文壇諷刺も認められることに触れておきたい。

まず小説家の加納明治。作中には、彼の日記が度々引用

され、例えば次の通りである。

「天気快晴。朝食。果汁、半熟卵、とーすとばん、まーまれーど。午前中仕事。」

昼食。野菜入りイタメウドン（粉ちーずカケ）野菜どれっしんぐ。果物盛合（おれんじ他）。昼食後仕事。夕食。ぱたーじゅすーぶ、こーるみーと（牛肉、はむ）とまと、キューリ、ふるーつさらだ、強化ばん、よーぐるど。

夕食後二、タマニハ和風ノ食事ヲトリタシト、嫡女史ニ申シ込ム。夕食後仕事」

（中略）

「夜、視察ノタメ新宿ニオモムク。行人雑然タリ。ういすきい、洋煙草、菓子ナドヲ買イ求メ戻ル。佃安カラザレドモ、致シ方ナシ。コレヲノ禁制品ナクシテハ、予ノ精神ハヤガテ窒息スルニ至ラン（後略）」

秘書として雇った嫡女史による理想主義的な改革により、加納明治は酒、煙草を制限され、食事も味より栄養重視の洋食「ハウザー流」に改められてしまう。困惑し、改革に反発したい加納明治の心境が日記には表されている。しかしそれだけでなく、この加納明治の日記は、後に「断腸亭日乗」としてまとめられた、永井荷風の日記を明らかにな

ぞらえている。例えば「つむじ風」連載より約二年前に刊行された永井荷風の小説・随想集「裸体」(昭和二十九年二月、中央公論社)にも、「荷風戦後日歴」と題する日記が収録されており、その一節を挙げれば次のようである。

(昭和二十一年)三月初九。晴。(中略)町を歩みて人參を買ふ。一束五六本にて拾円なり。新円発行後物価依然として低落の兆なし。

(中略)

五月廿八日。陰。独活を煮て昼餉を食す。余老来好んで菜蔬を食す。蚕豆、菜豌豆、独活、慈姑のごときも。散歩の際これを路傍の露店又は農家について購ふことを得べし。東京の人に比すれば幸多しと云ふべし。飯後出で、鬼越の田間を歩す。梨島多し。

文語体にて、日々の天候や食事、購入品などを詳述した体裁において、加納明治の日記は、右の永井荷風の日記を如何にも彷彿させよう。その加納明治の日記は、語り手から「もつと齡をとつて小説が書けなくなれば、こんな日記を新聞雑誌に切り売りをして生活しようとの算段なのだから、いい気なものである」とコメントされている。永井荷風の創作活動に対する梅崎春生の皮肉が表されているのは、言うまでもない。加納明治は、永井荷風に代表される「明

治生れ」作家を象徴し、彼ら文壇の重鎮たちへの皮肉が込められた人物と見ることもできよう。言い換えれば、加納明治とその日記は、文壇諷刺という形を取りながら、梅崎の「明治生れ」批判の一翼を担っているのである。

次いで泉竜之助。彼は毎朝、「ポディビル」にいそしむ人物として描かれている。しかも語り手の視点から、「竜之助は自分のポディビルを『自分の美意識を自分の肉体に還元しようとするゲイジュツ的造形のひとつの実践』などと吹聴していたが、なに、その実は、自分のひよろひよろ姿が恥かしくて、幾分なりともこれで胸囲を上げようという、可憐な努力の実践なのであった」と記されている。

よく知られているように、「つむじ風」連載の前年あたりから、三島由紀夫がポディビルに取り組み始めていた。しかも、その三島由紀夫のポディビルは、石原慎太郎から、「氏の美意識を自らの肉体へ還元せんとする一種の文学的造形の試みなのだ」と評されていたのである(「文明批判の強靱な壁—三島由紀夫氏の文体—」、昭和三十一年八月「文学界」)。泉竜之助のポディビル、それに対する語り手のコメントが、三島由紀夫へ向けた梅崎春生の皮肉であることは明らかである。

ただし、この竜之助のポディビルに対するコメントは、「つむじ風」連載第七十六回(昭和三十一年六月七日「東京新聞」)に見られ、右の石原慎太郎の評論を梅崎春生が直接

参照したことはない。しかし、いくつかの語句の一致と発表時期の近さから、両者が無関係であるとも考え難い。三島由紀夫自身が当時、ポディビルに取り組む理由について、このコメントや石原評に近い内容の発言をしていたのかもしれない。そうした発言を、石原も、梅崎も目にしており、三島に対して前者は好意的に、後者は皮肉を込めて表したと推察できよう。

また「つむじ風」末尾に記された物語の後日譚を見ると、泉竜之助は「ポディビル」に「いそしみ過ぎ」のために「若干胸を悪くして、只今は清瀬の療養所に入っている」。対して三島由紀夫は、「つむじ風」連載開始より約三カ月前に発表したエッセイ「忘年記」（昭和三十年十二月十八日「毎日新聞」）で、自身に関して次のごとく記していた。

年忘れのつもりでポディ・ビルディングに精出してあるうちに、風邪を引いて一週間ほど寝込みました。これがロクマクでもあれば皆さんが大喜びで、年越しのお酒がうまくなるでせうが、あいにくただの風邪で、もうすつかり良くなりました。

後日譚における泉竜之助にも、三島由紀夫のポディビルに対する梅崎春生の皮肉が、やはり込められていたのである。三島由紀夫が本当に「ロクマク」だったらよかつたの

に、と言わんばかりである。

梅崎春生は「桜島」（昭和二十一年九月「素直」）による文壇デビュー直前、自分より約十歳年下でありながら、少し先んじて文壇に登場した三島由紀夫^⑩に対して、当時勤務していた赤坂書店の編集者の立場から接した経験があつた^⑪。その所為もあつて、梅崎春生の胸中には、三島に対する少なからぬライバル意識と反発の感情が秘められていたのはあるまいか。三島由紀夫に対する、これらの表現は、梅崎春生のそうした個人的な感情とも結びついていよう。

「明治生れ」批判と関わる永井荷風への諷刺と違つて、こちらには、あくまで余談として加えられた文壇諷刺に留まるかもしれない。

しかし、いずれにしても、これら加納明治、泉竜之助を通じた表現より、「つむじ風」には、同時代の文壇諷刺というべき一面も持たされていることが確かめられたであろう。

三―(2)

「つむじ風」における「明治生れ」批判は、実はこのような文壇諷刺の側面と併せて捉え直す必要がある。正確に言えば、当時の文学界から強く影響を受けた、ある社会現象に対する梅崎春生の見解が、そこには多分に反映されているのである。

そのことを理解する手掛りとして、次の一節に注目した

い。これまた泉竜之助が関わり、しかし直接本人でなく、父・恵之助が息子の部屋について感想を呟く場面である。

「それにこの部屋の乱雑なこと。すこしは片付けたらどうだ。(中略)障子までが穴だらけじゃねえか。まさか『太陽の季節』の影響じゃあるまいな?」

ゲイジユツには無縁の恵之助老ですらも、この高名な小説にだけは目を通してのだから、大したものである。

「太陽の季節」とは、「つむじ風」連載の前年にあたる昭和三十年七月、第一回「文学界」新人賞受賞作として同誌に掲載され、同年下半年芥川賞も得た、石原慎太郎の文壇デビュー作である。発表以来、賛否両論、さまざまな評判を呼びながら、大ベストセラーとなったことは、今更説明の必要もあるまい。

「つむじ風」では、別の場所で、登場人物の一人が「近頃、わりと上流階級の若い人が小説を書いて、よく売れているようでございますね」と呟く一節もあり、これまた石原慎太郎と「太陽の季節」を匂わせている。梅崎春生が「太陽の季節」を意識しながら「つむじ風」を書き進めたことは、これらの表現から窺われよう。

特に右の引用で加えられた語り手のコメントには、「太

陽の季節」が、「ゲイジユツには無縁」な人々にまで知れ渡った、いわば非文学的な流行小説に過ぎないという、梅崎の皮肉も表れており、作品それ自体の評価としては、同作に否定的であったことが確認できる。

しかし重要であるのは、「太陽の季節」に対する梅崎春生の評価ではない。

右の引用に改めて目を向けると、恵之助が「『太陽の季節』の影響」と呟いたのは、竜之助の部屋の「穴だらけ」の「障子」を見たからであった。「太陽の季節」には、主人公竜哉が「勃起した陰茎を」「障子に突き立て」、障子は乾いた音をたてて破れる場面がある。竜之助がこの「太陽の季節」の主人公と同じ行動をしたかと、恵之助は不安を抱いたわけである。

しかも竜之助は、恋人一子から「竜ちゃん」と呼ばれており、「太陽の季節」の主人公も、恋人英子から、やはり「竜ちゃん」と呼ばれている。それぞれ「りゅうちゃん」と読むのか、「たっちゃん」と読むのか、ルビがないために正確なところは不明であるが、いずれにしても、竜之助の恋人による愛称は、漢字表記上、つまり視覚の上では、「太陽の季節」のそれと同じである。このことも含めて、竜之助には、ポデビルによる三島由紀夫への皮肉と別に、「太陽の季節」の主人公を読者に想起させる役割も認められるのである。

「太陽の季節」が文壇内外の注目を集め、大ベストセラーになった大きな理由として、主人公竜哉を初めとする若者たちが、作中において、快楽の赴くまま、反倫理的に行動していることが挙げられる。そのような「太陽の季節」における若者像は、同時代の若者たちに大きな影響を与え、竜哉たちのごとき若者を称した「太陽族」なる流行語が登場し、さらには「太陽族」を描いた「太陽族映画」まで次々と創られる状況に至った。

一方、年長者たちの多くは、この「太陽族」、「太陽族映画」の流行に対して、当然のごとく眉を蹙めた。それらを排斥するべく、年長者を中心とする「太陽族」批判の渦が巻き起こったのである。「つむじ風」の連載は、前年から始まった、この「太陽族」ブーム、年長者による「太陽族」批判のピークとも言える時期と重なっていたのである。

「つむじ風」に登場する泉竜之助、猿沢一子、陣内陣太郎、西尾真知子らは、当時の言い方をすれば、まさにこの「太陽族」世代と重なる。梅崎春生は、竜之助を初めとする、彼ら若者たちを「太陽族世代」として意識させようとしており、実際、多くの読者が、彼らを「太陽族世代」として捉えたのは間違いない。

しかし梅崎春生は、彼ら「太陽族世代」である若者たちを年長者たちによる非難の対象にさせるのではなく、逆に若者たちを「明治生れ」の人間たちによる被害者として表し

た。(若者たちによる年長者批判)を描いて見せたのである。ここに梅崎春生の重要な創意が認められよう。

すなわち「つむじ風」は、若者たちの立場から「明治生れ」を批判し、「近頃の大人の気持は判らない」と主張させることで、当時の社会に渦を巻いていた「太陽族」批判への異論を、皮肉な笑いに包んで提示しているのである。

おわりに

かくのごとく「つむじ風」は、「明治生れ」の人間たちが、つまらぬ「意地」と「面子問題」から、若者たちに多大な迷惑をかけ、またやはり「明治生れ」の人間たちが、これまた若者たちから手玉に取られる様を描いている。「明治生れ」の愚かさに対し、若者たちの賢明さ、したたかさが強調されている。その作者のモチーフの背景には、連載の前年に発表された石原慎太郎「太陽の季節」の影響により、若い世代を否定的に捉えた「太陽族」批判が、いわば日本の社会現象として存在していた。

何時の時代でも、年長者は「近頃の若い者云々」と嘆き、若者を批判する。「つむじ風」連載当時、梅崎春生自身も「太陽族」と呼ばれた若者たちに対して、実際は必ずしも好意的でなく、批判的な心情も持ち合わせていたであろう。しかし、それより十年前、「明治生れ」の人間が「天皇には盲目的服従」し、愚かな政策を推し進めたからこそ、日

本は戦争の道突き進み、多くの若い命が不幸にも喪われてしまった。その「明治生れ」の多くが自らの愚かさを反省せず、今また国家の枢要の地位にあつて、若い世代を「太陽族」と称して批判している。おかしな話ではないか。本当に批判さるべきは、若者たちでなく、かつて日本を不幸に陥れた、「明治生れ」ではないか。

「つむじ風」は表面上ユーモアに覆われつつも、このような梅崎春生の痛烈な批判を一つの側面として隠し持っている。自らの従軍体験を素材にした「桜島」で文壇デビューし、〈第一次戦後派〉と称されたこの作家が、社会的な視野を拡げつつ、一貫して持ち続けてきた戦争批判を暗々裡に表し、梅崎春生文学のモチーフと方法の深化を示した貴重な一作と見做せるのである。

注(1) 日沼倫太郎は「書評・梅崎春生著『つむじ風』」(昭和三十二年六月『新日本文学』)で、「わらいの効果というものを、めんみつに計算し」「読者をたのしませてくれる」「たいへん、オモシロイ小説」と評した。

(2) 和田勉「梅崎春生の文学」(昭和六十一年十一月、桜楓社)。日沼倫太郎も、注(1)に挙げた書評で、「権威や因襲のかけにかけられた現代人のウジウジした生活を嘲笑し」た「諷刺小説」と書いている。

(3) 猿沢三吉には、十六歳の次女・二美、小学生である三女・三根、四女・五月も存在する。彼女らも広くは

若者たちと言えようが、二十代の四名とは世代がやや異なり、年長者たちへの対し方も同じではないため、考察の対象から外した。

(4) 小松伸六「解説」(新潮社版『梅崎春生全集』第五巻、昭和四十二年三月)、戸塚麻子「戦後派作家 梅崎春生」(平成二十一年七月、論創社) 参照。

(5) 梅崎春生は、大正四年二月十五日生。

(6) 「神風タクシー」は、昭和三十三年の流行語の一つに数えられている(昭和史研究会編『昭和史事典』昭和五十九年三月、講談社)。

(7) 梅崎春生はエッセイ「道と人権」(初出不詳、昭和三十七年(推定)で、「とにかくあの神風タクシーというやつは、スピードを出し過ぎる。(中略)こういうのが、とかく人をはね飛ばし、ひき殺す。道における人権を回復せよ」と批判している。また梅崎の短編「炎天」(昭和三十二年一月『群像』)には、主人公らが乗った小型タクシーが、「乱暴」な運転で「非常なスピードで走り」、「子犬を一匹はね飛ばす」様子が描かれている。

(8) 大正六年九月十六日から昭和三十四年四月二十九日に至る永井荷風の日記。「戦災日録」(昭和二十一年三月六月『新生』)以来、逐次発表、刊行された日記をまとめたもの。「荷風全集」第十九〜二十四巻(昭和三十八年三月〜三十九年九月、岩波書店)等に収録。

(9) 永井荷風は明治十二年十二月三日生。

(10) 三島由紀夫は大正十四年一月十四日生。

(11) 梅崎春生は昭和二十一年三月、赤坂書店入社。「赤坂書店の頃は(中略)自分より年下の三島由紀夫に先生と言わねばならん、などとぼやいてもいた(和田勉作成「梅崎春生年譜」「梅崎春生の文学」)。また梅崎と同時期に赤坂書店に勤務した吉田時善によれば、喫茶店で編集者と三島由紀夫が歓談中、話題が「新宿の闇市のことに及」び、梅崎春生が「一度三島さんを、あの闇市に案内したいですね」と語りかけたところ、三島由紀夫から「ぼくは、あんなところは、関心ありませんね。近くを通つても、のぞいてみたいとも思いません」と冷たく返されたこともあつたらしい(吉田時善「地の塩の人」、昭和五十七年三月「新潮」)。

(12) 「つむじ風」の連載中、例えば「週刊朝日」昭和三十一年七月十五日号に、「もういい、慎太郎」―太陽族映画をたたく―との記事が見られ、同年七月二十三日付「朝日新聞」にも、「太陽族映画」と「男女共学」との見出しの下で、「太陽族映画」の賛否を語り合つた「母親の座談会」が掲載されている。

梅崎春生の作品引用は、全て新潮社版「梅崎春生全集」全七巻(昭和四十一年十月―四十二年十一月)に拠つた。引用文中、旧字体は新字体に改めた。

【付記】

筆者は先に「梅崎春生「つむじ風」における三組の男女―戦後の(男女平等)そして日米関係―」、平成二十六年十二月【別府大学国語国文学】第五十六号)を発表している。脇

役として登場する三組の男女―浅利圭介と妻ランコ、猿沢三吉と学生メカケ西尾真知子、加納明治と秘書橋佐和子―に注目することで、戦後日本の男女関係およびその背景にある日米関係を諷刺した小説として、「つむじ風」を論じた。本論と併せて参照されたい。